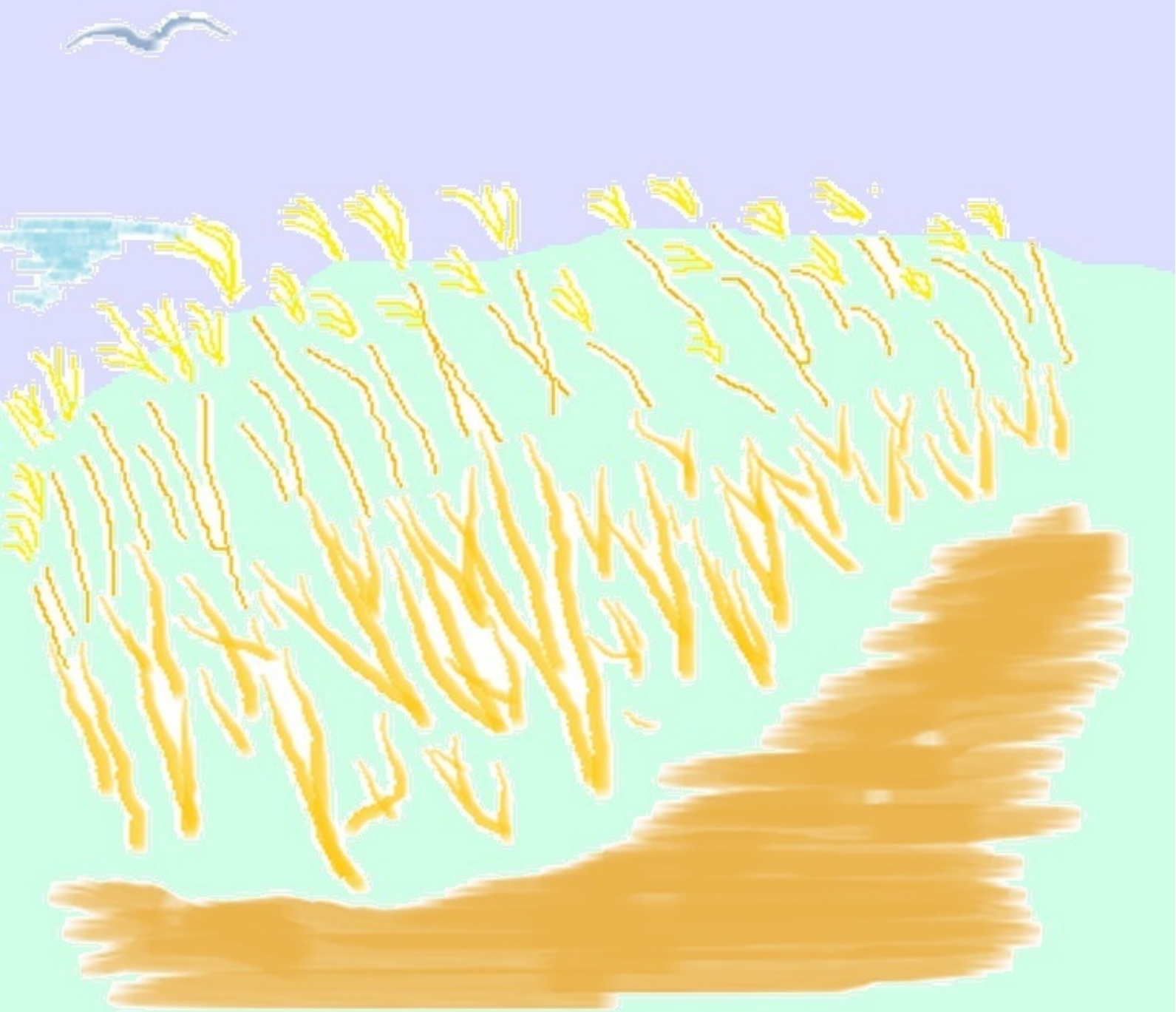


# すすき野峠



ジヴ.T

1

兄が死んだ。

僕より13歳離れた兄、二人だけの兄弟だった。

父母を否定し、僕を信じる兄、僕はそんな兄を愛していた。

僕は、車を西に向けて走らせた。兄の望みを叶えるため。

兄の死は突然だった。でも、悲しくは無かった、なぜなら、兄はずっと前から早く死が訪れることを望んでいる事を、感じていたから。

兄は高校2年までは素直で良い子で育っていたと母は言う。高校2年の2学期から兄は突然部屋に閉じこもりきりになり、学校に行かなくなり、両親がいさめると荒れて物を壊した。それまでは、父母が望むよう、勉強も良くし、良い学校に進学し、良い会社に就職すると思われていた。父母は期待をし、励ましていた。

その時から兄は、父母とは一切言葉を交わさなくなった、ただ唯一僕とは話した。普通に穏やかに。そんな兄も、2年ほどで外に出るようになり、アルバイトをするようになったが父母に対する態度は変わらなかった。そして、2ヶ月に一度ほど2、3泊の旅をする様になった。

あれは僕が小学校6年の時だ、両親がいない時、兄さんが僕の部屋に来て

「明日学校に迎えに行くから、兄さんと旅に行こう。親父達には内緒だぞ」

「えっ、何処へ」

「今は言えない、行けば分かる」

「でも一、怒られるよ」

「大丈夫、書置きをしとくから、おまえは、怒られることは無い」

次の日、兄は校門で待っていた。そのまま、兄と共に駅へ行き、ランドセルをコインロッカーに入れて電車に乗った。30分ほどのって電車を乗り換えた。今度は長距離の特急電車だった。

その特急電車は3時間半乗って、また各駅停車に乗り換え3つ目の駅でようやく電車をおりた。電車の中で僕は不安から、帰ろう、何処行くの、父さんに怒られるを繰り返していた。

そのたびに兄は、「大丈夫、おまえのことは俺が守る」と笑顔で言っていた。

外はもう暗かった。駅前のとうりを少し歩いたところの旅館に宿を取り、兄は旅館の部屋から僕に家へ電話をさせた。兄と一緒に言うことと元気、あさって帰る事だけ言うようにと言われて、僕が言うと、母は兄に代わりなさいと言ったので、兄に受話器を渡すと、兄は黙って小言を少し聞くと、何も言わず電話を切った。それから僕は疲れて眠ってしまった。僕が眠る頃、兄は窓から、ぼーと月を見ていた。

翌日、僕達は駅前からバスに乗った。兄は「ここは〇〇県だ、この駅の名前を覚えておいてくれ、そして、これから行くところも、兄さんが死ぬまで覚えておいてくれ。」と言った。

バスは坂を登り、下り、右へ左へ山道を走った。僕は少し気持ち悪くなったが、兄はそんな僕に、これまでした旅のことを楽しそうに話して聞かせ、気をまぎらせてくれた。バスを降りたのは、40分もしてからだった。待合所も無く、ただ停留所の印看板だけである、その看板には「すすき野峠」と書かれてあった。小高い山の連なる、眺めの良い峠で、バス道はここからゆっくり川があると思われるような、深めの谷あいへ下っていた。その谷の先には、小さな漁師町と思われる集落、そして海がわずかに見えた。道を隔てた反対は、それまで続いていた雑木林が途絶え、低木と雑草の丘陵地になり海に降りて行っていた。

「こっちだ」と兄は、丘陵地と雑木林の境の道に入った。

「一時間ほど歩くぞ。疲れたら休むから言ってくれ」

僕はもう、不安や怖さは無かった。ススキの穂を揺らしながら来る、海風がとても気持ち良く、丘陵から見る景色は、都会に暮らす僕には素晴らしいものだった。

丘を二つ超え三つ目で車が何とか通れる道が終わり、と同時に草原も切れまた雑木林になった。

兄は、その雑木林に入る、人がとられるだけの道に入った。道は少し下り、ゆるやかに可也雑木林を登り、ちょっと下った所で木の間隔が広がり、林が切れ、視界が広がった。300メートルほど草地の先に、海が広がっていた。兄は海に一番近い大きな木の下で腰をおろした。

「ここ、おまえに覚えておいてほしい」と、兄は言って、遠くに視線を置いた。

.....

翌日、僕達は夕方、家に着いた。兄は再三僕に行った場所と、大きな木の下で話したことは誰にも話してはいけないといった。

父母は兄を可也強く叱り、何処へ行ったかも問い詰めたが、兄はけして口を開かなかった。

そして、父母が落ち着き始めた時、「大丈夫、もうしない」と言って、自分の部屋に戻って行った。

父と母は驚きで互いに顔を見合わせた。兄が、父母に喋ったのを僕の記憶の中では、はじめて見た。

そのあと、母は僕に聞いたが、僕も兄と同じように、けしてその事は言わなかったし、言えなかった。

そんな事から1年後、兄はアパートを借りて一人住まいをした。それからは、良く両親がいない時に家に戻り、僕と話をした。僕にとって兄は、良い相談者でもあった。

兄の旅へ出る回数は、年に2回ほどに減った。しかしそのうちの一度は、私を連れていった場所に行っていて、帰ってくると僕に「あそこは変わり無い」と告げ、そうでない時は景色のすばらしさ、見た動物や植物の話を僕に聞かせた。兄は気が付けばアリも踏まないようにする人だった。

僕は、高速道路を西に向けて走っている。もうすぐ、夜が開ける、東の空が明るくなっている。途中、何度か地図を確認した。一番近いと思われるインターを降りた時は、もう朝6時、日が始めている。ここから、兄との約束の地は迷わずに行けても1時間半は掛かるだろう。

それから僕は、地図を頼りに、例の駅を目指した。途中、道の確認のため、2度道を尋ね思ったより早く着いた。田舎道で信号が無いためだった。

駅は閑散としており、あの頃僕達が泊まった古びた旅館は、通りにあったがひどく建物がいたみ、営業はしてなかった。お婆さんが一人と高校生らしい女学生が2人待合室にいた。僕は女学生に声を掛け、すすき野峠への道を尋ねると「ここから、1キロほど北へ行くと右側に酒屋がありその角を右に曲がればあとはまっすぐ」と教えてくれた。僕は御礼を言い、自動販売機でジュースを買いまた車を走らせた。

酒屋のところを右折するとすぐに舗装路は切れて、砂利道になった、僕はこの道のことはあまり覚えていない。バスに酔ってしまい兄の話を聞くことが精一杯だった。兄はここへの旅のあと必ず僕のところに来て、「あそこは変わり無い」と言っていたので、バス停の名前と峠の景色だけがたよりだった。角を曲がって30分ほど突然懐かしい景色が目の前に広がった

「ここだ」バス道の左側はあまり深くない谷、その谷にバス道はゆっくり降りている、谷の先には集落と海がわずかに見える、バス道の右側は草地の丘陵、偶然なのか兄ときた頃と季節がいっしょだった。初めて兄と旅をしたところそして、これが最後の旅。

僕は丘陵に入る道を探した、バス道をバス停から少し戻ったところに、めったに車も人も入らないようで、轍が微かに残っている、右側の雑木林左側の背の高いすすきがなければ、気が付かないかも知れない。僕は車をバックさせその道に分け入った、途中何度か道を外れそうになったが、4輪駆動の車であったので難なく突き当りまで行けた。そういえば、この車は、兄が僕にくれたのだった、こんなことまで考えていたのだろうか？

僕が高校3年の時、兄に車の免許が取りたいと求めた時、兄は「父母に許可をもらって来い、そしたら金出してやる、その代わり俺も取るから一緒だぞ」と言って兄と一緒に通った。兄は歳のせいか、上がり性の性か、僕より一月も遅れて卒業するのに掛かった。そのくせすぐにローンでこの車を買って3ヶ月ほど乗って、「俺には、どーも車は合わないよーだ。電車やバスの方が性にあってる。お前にやる」と言って僕に車をくれた。その後も兄は僕にくれた車のローンを払い続けていた。

「兄さん、ちょっとここで待ってな」後部のスペースに横たわった兄に声を掛け、スコップを持ち林の中の微かな道を僕は進んだ。少し下り、そして登り、木の間隔が広がり小高いところを超えると懐かしい景色が広がった。

「ここを覚えといてほしい」

「ここ、どうして」

「兄さんが死んだらここに埋めてほしい。」

「えっ、兄さん死んじゃうの。」

「心配するな、今すぐじゃない。....人はみんないずれ死ぬ、父さんも母さんも兄さんも友達もそしてお前も。...兄さんは今の人間は嫌いだ、だから、死んだ後ぐらい一人でここで過ごしたい」

「ん.....うん」

「まあ、難しいことを言っても、まだ、お前には分からないだろう。だから、これは、兄さんの最後のお願いだ。兄さんの体は焼かないで、ここに埋めてほしい。」

「ん.....うん」

「それから、兄さんの今頼んだことは、法律違反、法律違反は分かるよな」

「うん、何となく」

「見つければ、警察に捕まる、死体遺棄というんだ。だから、このお願いは誰にも内緒だ。いいね。」

「ううん、分かった」

「ごめんよ、こんなお願いをして。父さんや母さんは俺のことを理解しないし、俺より早く死ぬだろうお前しかいないんだ。」

「うん、分かった、頑張ってみるよ」

「ん、それから、これはお前がしたことは、兄さんが希望したことであるという手紙だ。これに入れてここに埋めておく、少しは役に立つだろう。」兄はうなずき、手紙の入ったピンを、木の根元に埋めた。

「有難う、これで、また生きていける」

それから、僕達は、夕刻のバスがくるまで、ここで遊びまわった。

深さ1メートルほどの、兄を埋葬する穴を掘るのに、小一時間掛かった。ほとんど石は無くやわらかな土だったので掘りやすかった。兄のことだから、そんなことも考えておいたのだろう。

兄の遺体を車にとりに戻った、冷たく、硬く、重たい兄の体「重たいなー、兄さん」。

「すまんー」そんな声が僕の心の中で聞こえた。昨夜の通夜と一睡もしていないので僕はとても疲れていて兄を運ぶのが大変だった。木の下についた頃は、息が切れていた。少し休んで兄を穴の中に入れ、手を合わせて土をかぶせた。気のせいか兄が笑っていたような気がした。土をかぶせ終わると掘る前に取り除いた草や幼木を元のように戻した。誰にも見つからないようにと願いながら。

終わるとまた「ありがとう」と心の中で兄の声がした。僕は兄が埋めたピンを木の根元から掘りだし兄の隣に寝転び「兄さん、疲れたよ。少しここで寝るよ」「ああ、いいよ」。

5、6時間ほど寝てしまったようだ。寒くて目がさめた。体を起こし海を見た、後一時間もすれば太陽が海に沈むだろう。僕はピンのふたを開け、中の丸めて4枚ある便箋を取り出してみた。

最初の一枚は僕にだった。(和也、有難う、お前が居たから俺はここまで生きて来れた。有難う)日付けが書いてあった(1900年 10月 2日)。兄さんは、毎年この時期に来て、この手紙を書きなおし、僕にここが変わり無いことを伝えていたんだ。

2枚目は父と母にだった。

(父母へ、和也にこんなことをさせてすいません、ほかに信用出来る人がいなかった。

俺はあなた達が憎かったわけではない、俺はあなた達が望むように生きられないし、生きたくもなかった。生きていく内に大人達の行いが信用出来なくなった、その中にあなた達もいた。ただ、それだけの事。)

残りの2枚は今回の事は、自分が弟に、無理にさせた事を細かに書いてあり、署名してあった。

僕は便箋をピンに戻し海を見た。空が赤らみ始めている綺麗な夕焼けが見えそうだ。

「兄さん、家は大騒ぎだろうね」

「きっそうだ。ははは……」心の中で兄の笑い声が聞こえた。

すすき野 峠

<http://p.booklog.jp/book/77133>

著者 : ジヴ.T

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kacyakacya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77133>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77133>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ